

氏名	横山豊治			
学位の種類	博士（保健学）			
学位記番号	甲第3号			
学位授与の日付	平成22年3月16日			
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当			
学位論文題目	社会福祉士の生涯研修に関する研究 —大学院でのリカレント教育を中心に—			
論文審査員	主査	新潟医療福祉大学	教授	山手 茂
	副査	新潟医療福祉大学	客員教授	岩崎 浩三
	副査	龍谷大学	教授	大友 信勝
	副査	東洋大学大学院	教授	佐藤 豊道

論文内容の要旨

本論文は、ソーシャルワーカーのうち、特に社会福祉士に焦点を絞り、この社会福祉専門職に求められる生涯研修の現状について検討を加え、改善の課題を明らかにするとともに、積極的に自己研鑽に取り組み、資質向上に努めるソーシャルワーカー像のモデルを事例調査によって創出することを目的とした帰納法的な方法による研究である。

第1章では、本研究の目的と社会的な意義、社会福祉学研究における位置づけ、用いる基本的な用語と概念について述べた。第2章では、本研究の主題に関する先行研究について検討した上で、日本社会福祉士会、日本医療社会事業協会等のソーシャルワーカー団体の生涯研修制度の概要、保健・医療・福祉の専門職団体の生涯研修制度の概要、アメリカのソーシャルワーカー団体における継続教育制度や専門資格等の認定制度の概要について、文献資料をもとに概観し、それらの特徴を検討しながら、社会福祉士の生涯研修の現状と課題を明らかにした。

第3章から第5章は、オリジナルな調査の報告である。

「積極的に自己研鑽に取り組み、資質向上に努めるソーシャルワーカー像」のモデルを創出するために、自己研鑽の方法としては現職者にとって特に集中した努力を要する「大学院でのリカレント教育」に取り組んだ社会福祉士を対象とした調査を行った。

第3章では、調査方法とその前提となる研究者（筆者）の立場について説明した。調査はインタビュー調査であり、それによって得られたデータを質的分析方法のひとつである修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。

第4章では、社会人大学院生を経験し、仕事を継続・再開しているソーシャルワーカー12名へのインタビュー調査の結果を記述した。結果は、①ソーシャルワーク実践の中から大学院進学への動機が形成されるプロセスと、②ソーシャルワーカーが大学院での学習・研究を通して専門職としての豊饒化を図るプロセスの2点についてまとめ、「自己実現への志向」や「専門職としての多面的な成長」が鍵概念になり得ることを明らかにした。

第5章では、調査結果を受け、本論文全体の結論を述べた。仕事との両立に苦勞しながらも、時間

と労力を集中的に傾注して勉学に励み、自分の問題関心に動機づけられながら論文執筆などを成し遂げた社会人院生たちの経験からは、広い視野から物事をとらえ、目前の現象のみに目を奪われないソーシャルワーカーとしての洞察力が強化され、自己実現を大切にする生き方と人間的な「豊饒化」を物語る言動が認められた。

今日の社会福祉士には、福祉ニーズの増大、多様化、複雑化に対応できる力量が求められており、その働きが期待される分野も司法や学校教育、就労支援などの場へと拡がりを見せていることから、その養成教育の充実とともに資格取得後の生涯研修の充実が社会的に求められている。また、社会福祉士会等の専門職団体には、社会に対して構成員の資質保証に努める使命があり、大学・大学院等の福祉系高等教育機関とも連携して、構成員の資質向上を促し、支援する使命がある。

日本社会福祉士会は、設立当初から独自の生涯研修制度の構築に向けて検討を重ね、3年毎に更新を継続していく共通研修課程を中心とした制度を1999年度から開始し、研修を会員の義務としてきたが、10年間の経過を検証してみると、その実施率は対象会員の1割以下であることが明らかとなり、社会的な信用を得るには程遠い実績といわねばならない。同会内でも現行の生涯研修制度の見直しが始まっているが、会員の生涯研修への関心を高め、参加を活性化させるには、会全体を底上げするようなシステムの再構築が望まれる。

そうした組織的な取り組みの一方で、本研究のように自己研鑽に積極的に取り組む先導的な社会福祉士に着目し、彼らはなぜそうした努力を自発的にするようになったのか、またその取り組みは職業人生をどのように豊かにするものなのかを明らかにすることも、生涯研修を活性化させ、専門職文化を豊饒化させる一助になる。

また、わが国では、20世紀末からの約10年間に福祉系学部学科をもつ大学が急増したことを背景に、福祉系大学院の開設が進み、夜間開講制や通信制も含めたりカレント対応型の専門職修士課程も設置されるなど、社会福祉従事者の学び直しにも門戸を開く大学院が増加しながら、全体としては定員の充足率が低くなっており、教育資源が十分に活かされていない。実践現場を持ちながら大学院で学習・研究することの意義が、専門職の生涯研修の観点から多くの関係者に理解されることが望まれる。

キーワード：社会福祉士、ソーシャルワーカー、生涯研修、大学院教育、リカレント教育

論文審査結果の要旨

本論文は、医療・保健・福祉を中心とする専門的ヒューマン・サービスの分野において、新しい専門職として確立する途上にある社会福祉士の生涯研修推進に寄与しようとする意欲的な論文である。副審査員を引き受けて頂いた佐藤豊道教授は、第一次審査の判定に際して「本論題に関するわが国の研究水準を高めていくうえでのマイルストーンとして位置づけられる」と高く評価され、「加除修正を行うことにより“可”と判断される」と書かれている。同じく副審査員を引き受けて頂いた大友信勝教授も岩崎浩三教授も、ともに「一部修正が必要である」と判定し、修正あるいは再検討すべき点について、懇切に説明された。第一次審査において指摘された点を、慎重に再検討し、修正した本論文を二次審査して頂いた結果、3副審査員とも「合」と判定された。したがって、審査員4名一致して、「合」と判定した。

本論文の内容は、以下のとおりである。

第1章においては、本研究の目的と社会的意義、社会福祉学研究分野のなかでの位置づけ、基本的概念などを明らかにしている。

第2章においては、本研究のテーマに関する先行研究について検討した後に、日本社会福祉士会、日本医療社会事業協会等ソーシャルワーカー団体をはじめ、医療・保健・福祉分野の専門職団体の生涯研修制度（システム）の概要、さらにアメリカのソーシャルワーカー団体の継続教育や専門資格認定の制度についても検討し、わが国の社会福祉士会を中心とする生涯研修が普及しない現状と今後の対策を明らかにしている。

第3章・第4章・第5章は、自主的に大学院修士課程に進学してリカレント教育を受けた社会福祉士を対象とする調査研究の報告である。

第3章においては、調査研究方法について詳細に検討した結果をまとめている。その調査研究方法は、近年わが国で用いられるようになった「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ」である。この調査研究方法は、質的調査研究方法として、ソーシャルワークや看護の分野で使用する研究者が増加している。この方法を用いて、インタビュー調査した経過が、詳細に説明されている。

第4章においては、社会人大学院生になって学習・研究した後に再びソーシャルワークの仕事に就いた人、およびソーシャルワーカーとして働きながら、通信制または夜間開講制の大学院で学習・研究を修了した人、合計12名を対象として詳細なインタビュー調査を実施し、それによって得たデータを丹念に分析している。その結果、①ソーシャルワーク実践経験の中から大学院進学の動機が形成されるプロセスと、②ソーシャルワーカーが大学院において行なった学習・研究を通して専門職として豊饒化するプロセス、という二つのプロセスをまとめて、「自己実現への志向」や「専門職としての多面的な成長」が、キーコンセプトとして抽出できる、としている。

第5章においては、調査結果に基づいて本調査研究の結論をまとめている。ソーシャルワーカーとしての仕事と家族の一員としての役割に加わる大学院生としての学習・研究活動などとの調整に苦勞しながらも、時間とエネルギーを集中的に傾注して学習・研究に励み、自分の問題関心に動機づけられながら、修士論文を書き上げるなど、課題を達成した社会人大学院生たちの経験から、多くの教訓を引き出すことができる。広い視野から物事をとらえ、目前の現象の背後にある諸要因を動的に洞察するソーシャルワーカーとして必要な認識能力を強化することができる。自己実現を大切に生きる生き方や、人間として自己を豊饒化していることを示す言動を知ることができた。

現在、社会福祉士には、福祉ニーズの増大・多様化・複雑化に対応する能力が求められている。その活動分野は、保健・医療職との連携、受刑者の社会復帰支援（司法）、学校不適応児支援（教育）、就労支援などの分野に拡大している。したがって、大学における社会福祉士養成教育に生涯研修の意義や方法を理解させ、大学院社会福祉学専攻修士課程にリカレント教育を充実させるなどの改革を進める必要がある。

以上要約した本論文は、博士論文に値すると判定される。